



三田「幻の門」の由来と変遷

三田キャンパスの東館を抜け、左側に上るスロープの先に「幻の門」と呼ばれる門柱が見える。その歴史は、慶應義塾が三田に移転した明治時代初期にさかのぼり、当時はこちらが表門Ⅱ「正門」だった。カレッジソングにも歌われ、明治く大正く昭和く平成く令和と時代を超えて、慶應義塾の歴史を見守ってきた「幻の門」の由来と変遷をたどってみよう。

時代の変遷とともに「門」も生まれ変わる

1871（明治4）年、慶應義塾は芝・新銭座から三田の肥前島原藩松平家の中屋敷に移転した。現在の東館の辺りに大名屋敷の名残である木造の黒塗りの門があり、それをそのまま慶應義塾の門として使うことになった。敷地西側（現在の中等部側）の網町方面に通じる門を「裏門（あるいは西門）」と称したので対して、こちらは「表門（あるいは正門）」と呼ばれた。

1901（明治34）年2月の福澤諭吉葬儀の際は、三田山上の福澤宅から出発した葬列は表門を抜けて、三田通りを赤羽橋、一の橋と経て、葬祭場の善福寺に向かった。まさに



1935年、幻の門と塾生

慶應義塾の表玄関であったのだ。

1913（大正2）年夏、老朽化が進んだ木造の門は倒壊の恐れも出てきたため、花崗岩製の門柱と鉄扉を持つ洋風の門に生まれ変わった。形式にとらわれない義塾の気風から、門標さえ掲げられない極めてシンプルな門だった。

第2次世界大戦中の1943（昭和18）年11月、三田で塾生出陣（学徒出陣）の壮行会が挙行された。大講堂前を出発した出陣学徒は他の塾生たちに見送られ、表門から旅立ち、福澤の墓参に向かった。戦時中には、陸軍のトラックが門柱を破損した事件もあった。当時用度課長であった羽磯武平が、小泉信三塾長にそのことを報告すると「軍と雖も遠慮することは無用である。然るべく要求し請求すべきである」との指示を受けたそうである。

1945（昭和20）年5月の空襲で表門も被災したが、その2年後に横須賀三田会の寄付などによって修復された。戦後間もなく右側の門柱に「慶應義塾」と墨書きされた門標が掲げられた。しかし何者かに持ち



明治中頃
旧島原藩邸黒門
（写真提供：三田メディアセンター）



1998年、幻の門と馬留石

去られてしまい、今はその門標は慶應義塾には存在しない。

1959（昭和34）年、慶應義塾創立100年事業の一環で、南校舎が建設され、同時に現在の正門が新設された。表門は正式名称が「東門」に変わったが、その後も塾生の間では「幻の門」の異称で親しまれた。

異称「幻の門」の由来はカレッジソング「幻の門」？

「幻の門」という異称は表門に門標が掲げられていなかったことが由来であるという説があるが、やはりカレッジソング「幻の門」をその由来とする説が有力である。

1933（昭和8）年の春、ワグネルンサイエティーと応援部（現在の応援指導部）との企画により、カレッジソング「幻の門」が作られた。『応援指導部75年史』によれば、同年に正式発足した応援部の団長・柳井敬三が「スポーツの応援だけでなく、例え、わし等が卒業して、パリジャロンドンじゃのに向うて、日本を発つ時に、

見送りに唱って貰えるような、立派な歌を作って置かにならん」と考えたことが始まりといわれている。

当初、作詞を依頼した北原白秋には早稲田出身であることから断られ、作曲を担当する山田耕筰の推薦で詩人・フランス文学者であった堀口大學（塾員）が作詞を担当。かくして「幻の門こすぎで叡智の丘にわれら立つ」と歌われるカレッジソングが誕生した。

堀口は後年、たとえ外見は粗末でも「青春のあこがれと理想を迎え入れる大きな門が聳え立ってゐるやうに感じられたものでした。これがまた形式にとらわれない塾の精神と相通じるやうに私には思へたものでした。即ちこれを『幻の門』と呼んであの歌に歌いあげた次第です」と述懐している。深川の不動尊に願掛けをするなど心魂を尽くして「幻の門」の詞を構想したという堀口は、お披露目の早慶戦に小さな不動像を持参して臨んだ。その結果、慶應義塾は逆転劇を演じて勝利した。現在でも東京六大学野球の優勝パレードで、三田キャンパス東門に到着した際には「幻の門」が演奏される。

世紀を超えて義塾の歴史を見守り続ける「幻の門」

2000年に完成した東館の建設時に、幻の門は東館アーケードを通り抜け、ブリッジをくぐって左手に続く石畳のスロープの上、福澤公園に近い位置に移設された。併せて、石畳のスロープには馬留石の一部も移設されている。また、鉄扉の一部は、東館3階へ通じるブリッジ側面の飾りに転用された。

2021年春、慶應義塾ミュージアム・コモンズ建設等のため長らく封鎖されていた東館に続くスロープが開放され、再び幻の門を通り抜けることができるようになった。早春、



現在の幻の門

卒業生を見送るように坂道に咲く桜の木とともに、これからも幻の門は義塾の歴史を見守り続けていくことだろう。